

# 東アジアのキリスト教信仰に関する 比較宗教史的研究

Estudo comparativo sobre a fé católica  
espalhada nas águas extremas-orientais

菊地章太  
KIKUCHI Noritaka

## 要旨

2018年度の国内特別研究として、カトリック信仰の極東海域世界への伝播に関する比較宗教史的考察をおこなった。航海の守護聖女として媽祖をあがめる習俗は、中国南部の民間信仰からはじまって東アジアの海域に広範囲に普及していく。そこでまず日本列島において媽祖崇拝が最初期に伝わった長崎市、およびその最終的な到達地である青森県下北半島を調査対象とした。わけても長崎にその崇拝がもたらされた時期は世界史上の大航海時代にあたっていたため、イエズス会の宣教師によって東アジアに伝えられた聖女信仰と習俗が重ねられたことが予想される。そこでイベリア半島南部の大西洋沿岸地域を次の調査対象に選んだ。

リスボン市内のサン・ロケ教会にミゼリコルディアの本部がある。これは長い歴史をもつポルトガルの慈善組織で、大航海時代には同じ組織がインドのゴア、中国のマカオ、日本の長崎でさかんな活動を展開した。ミゼリコルディアで崇拝された恩寵聖母ノッサ・セニョーラ・ダ・グラサの像は各地に伝えられたが、ポルトガル西南端のサグレス岬にも恩寵聖母の礼拝堂が建立され、ここからアジアに向かった宣教師や船乗りを守護する存在として崇拝を集めた。彼らがたどり着いた極東の地で、同じ時代に崇拝が活発化した航海の守護聖女との混淆がひとつの可能性として浮かびあがってくる。本稿はここに至る調査の経過を報告したものである。

キーワード：媽祖 守護聖女 長崎 スペイン ポルトガル

## 1. 研究調査の経緯

国内特別研究「東アジアのキリスト教信仰に関する比較宗教史的研究」は媽祖崇拜の極東海域世界への伝播における重要な契機を比較宗教史的に探求する継続研究の一環としておこなわれたものである。媽祖崇拜に関する報告者の考察は、キリスト教禁教下の長崎におけるカトリック信仰の変質のありようをたどった2010年以降の学部一般研究にはじまる。長崎市内にはイエズス会の宣教師が伝えたキリスト教の聖女の信仰が根づいていた。聖女は航海の守護神として東アジアに来航したポルトガルの船乗りにより崇拝されており、それが長崎のキリシタンに受け継がれ、徳川幕府による禁教令の発布後も潜伏下でその崇拝は存続した。長崎にはそれ以前から中国の移民が多数暮らしており、彼らの故郷で航海の守護神として崇拝されていた媽祖が聖女の信仰と混淆しつつ変質をかさねていた。したがって媽祖崇拜の日本への伝播をたどるにはヨーロッパの宣教師が伝えた信仰を視野に入れることが必須の作業と考えられる。このことを報告者は2013年刊行の拙論に述べた（「対抗宗教改革時代における東アジアの宗教」石川文康編『知は東から—西洋近代哲学とアジア』明治書院、2013年、pp.145-164）。そこでは16世紀のカトリック教会による対抗宗教改革運動の世界的拡大という視野から東アジアの宗教の変容について考察を試み、スペインとポルトガルの宣教師や船乗りが航海の守護聖女の崇拝をもたらした土地に媽祖崇拜も根づいた可能性に言及した。

その後、2015～2016年度東洋大学井上円了記念大型研究特別支援助成（本学文学部伊吹敦教授研究代表者）「世界の諸地域における仏教の哲学的・社会学的研究」の分担課題「仏教と中国思想の研究」においてこの研究を継続し、その成果の一部は、2016年6月に北京の中国人民大学で開催された東洋大学・中国人民大学・韓国金剛大学共催による第五屆中日韓国際仏教学術大会において「民間信仰と仏教の融合—東アジアにおける媽祖崇拜の拡大をたどる」の題目で発表した。このとき提出した論文は「民間信仰与仏教的融合—関于東亜地区媽祖信仰的展開」と題して、第五屆中日韓国際仏教学術大会論集『仏教与伝統思想』に翻訳掲載された（中国人民大学仏教与宗教学理論研究所、2016年、pp.20-41）。さらに報告者による単独研究は、2017年度～2020年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金・基盤研究C）研究課題「媽祖崇拜の比較宗教史的研究—民間信仰と諸宗教の融合による東アジア海域世界への伝播」として採択され、考察を継続しつつある。

昨年度は報告者が東洋大学国内特別研究期間にあたるため時間を有効に使うことができた。2018年5月に青森県下北半島の沿岸部に学部個人研究費による研究出張をおこない、東アジアの広大な海域世界における媽祖信仰の北限を踏査した。本州の最北端にあたる下北郡大間町にはかつて天妃の祠があった。天妃の名は中国明代に媽祖にあたえられた封号である。大間の天妃祠は明治初年の神仏判然令によって村社の稲荷神社に合祀された。町のなかほど、海を見おろす小高い場所に社殿があり、境内の堂宇に天妃すなわち媽祖の像が現存する。長崎市崇福寺の媽祖像と同様に「天上聖母」の文字を掲げていた。下北半島突端の大間崎から北海道汐首岬までは18kmを隔てるのみで、海峡がもっとも狭隘になる。潮の流れはすこぶる速く海難事故の多発するところとして知られた。同地には八大龍王や弁財天のような水神も祭祀されており、海の難所ならではの信仰習俗を実感できた。このことは民間信仰における諸宗教の習合の実態解明へ向けて、報告者の今後の比較宗教史的考察に資するところが大きい。

南中国沿岸部の地方神であった媽祖の崇拝が海域世界の守護神として東アジアの広い範囲に伝播しはじめた16世紀という時代をふりかえれば、それは世界史上の大航海時代にあたる。ヨーロッパの宣教師や船乗りがこの地に頻繁に来航し、キリスト教世界における航海の守護聖女の崇拝も東アジアの海域世界に伝播したことはすでに述べたが、媽祖との融合ないしは混淆も当初予想していた以上に頻繁だったことが明らかになってきた。媽祖崇拝の比較宗教史的考察を推進していくためには、このことを大幅に視野に入れる必要が生じた。しかも研究の初期段階に想定していた一地方の聖女崇拝だけでなく、より広大な範囲における信仰圏の拡大を考えたとき、カトリック世界であれば聖母マリアの信仰がなんらかの形で関わっているのではないかと予想される。以上の問題意識のもとで海外調査を計画し、上述の科学研究費における海外調査費によって実現することができた。

## 2. 調査行程と概要

調査旅行の目的はスペインおよびポルトガル南端の大西洋沿岸部における航海の守護聖女の信仰の現態を現地調査をもとに明らかにすることにある。この調査は2018年10月から11月にかけて行なった。イベリア航空機にて成田空港を出発し、マドリード・バラハス空港に到着した。マドリード滞在後、



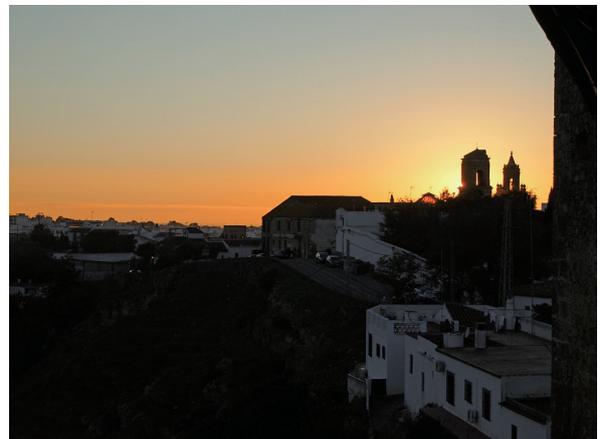
〔図1〕 サンタ・クルス修道院と大聖堂、トレド



〔図2〕 サン・フランシスコ修道院、グラナダ



〔図3〕 セビーリャ近郊から望むアンダルシア大平原



〔図4〕 サン・ペドロ教会、カルモナ

レンタカーで高速道路を經由してトレド市に到着し、市内サンタ・クルス修道院 Monasterio de Santa Cruz にて無原罪の聖母 Virgen de la Inmaculada Concepción ならびに被昇天の聖母 Virgen de la Asunción を見学した。ここでは現状の記述と写真撮影および関係資料の収集をおこなった(以下、すべての訪問先で同様の作業に携わった)。同市内トレド大聖堂 Catedral de Toledo [図1] にて慈悲の聖母 Nuestra Señora de la Misericordia を見学した。トレドではパラドール・デ・トレドに滞在した。

トレドから高速道路を經由してグラナダ市に到着し、市内グラナダ大聖堂 Catedral de Granada でアロンソ・カーノ Alonso Cano 作の無原罪の聖母像を見学した。同市内サン・フランシスコ修道院 Monasterio de San Francisco [図2] を見学後、パラドール・デ・グラナダに滞在した。グラナダから高速道路を經由してセビーリャ市に到着し、市内セビーリャ大聖堂 Catedral de Sevilla で13世紀の恩寵の聖母 Nuestra Señora de la Gracia、モンタニェス Montañes 作の無原罪の聖母、ムリリョ Murillo 作の無原罪の聖母壁画を見学した。セビーリャから一般道路を經由してエル・プエルト・デ・サンタ・マリア市に到着し、サン・マルコス城内にある聖マリア礼拝堂 Capilla Santa María, castillo de San Marcos を見学した。ここは後述するとおり「港の聖マリア」の聖地として13世紀から船乗りの崇拝を集めてきた場所である。ついで一般道路を經由してアンダルシア大平原 [図3] を通過し、



[図5] サグレス岬、アルガルヴェ



[図6] ノッサ・セニョーラ・ダ・グラサ礼拝堂



[図7] 恩寵の聖母像、グラサ礼拝堂



[図8] パルメラ市街、セトウーバル

カルモナ市に到着し、市内サン・ペドロ教会 Igreja de San Pedro [図4]を見学した。カルモナではパラドール・デ・カルモナに滞在した。

カルモナから一路西へ進んでスペイン国境を通過し、ポルトガル入国後は高速道路を經由してサグレス [図5]に到着した。サグレス岬サン・フェリペ要塞 Fortaleza de San Felipe de Sagres のノッサ・セニョーラ・ダ・グラサ礼拝堂 Capela de Nossa Senhora da Graça [図6]にある17世紀の恩寵の聖母像 [図7]を見学した。ユーラシア大陸の西南端に位置するこの土地は、後述するとおり16世紀以降の大航海時代に船乗りの崇拜を集めてきた場所であり、守護者としての恩寵の聖母の信仰がスペイン南部から特にポルトガルの大西洋沿岸部に及んでいた。このことは以後のポルトガル国内の調査で明らかにできた。一般に教会内での写真撮影は禁止されているが、ここでは撮影が許可された。サグレスではポサーダ・ド・インファンテ・サグレスに滞在した。サン・フェリペ要塞を再訪後、高速道路を經由してパルメラ市 [図8]に到着し、市内マトリス・ダ・ノッサ・セニョーラ教会 Igreja de Matriz da Nossa Senhora [図9]を見学し、パルメラ城 Castelo de Palmela [図10]のサンティアゴ礼拝堂 Capela de Santiagoにて慈悲の聖母像を見学後、ポサーダ・デ・パルメラに滞在した。

パルメラから高速道路を經由してリスボン市 [図11]に到着し、市内サン・ロケ教会 Igreja de São Roque [図12]の16世紀の被昇天の聖母像を見学した。教会附属美術館の特別展「リスボンのミ



[図9] マトリス・ダ・ノッサ・セニョーラ教会



[図10] ポサーダ・デ・パルメラから望むパルメラ城



[図11] アルカンタラから望むリスボン市街



[図12] サン・ロケ教会、リスボン

ゼリコルディア」*«Misericórdia de Lisboa»*にて恩寵の聖母の彫像と絵画を数多く見る事ができた。ミゼリコルディアはポルトガルで長い歴史を持つ慈善組織であり、恩寵の聖母像を特別な崇拜対象としている。この特別展を見学できたことはサグレス岬の礼拝堂見学とならんで今回の調査の大きな収穫のひとつであった。レンタカーを返却後、リベルダーデ・ティヴォリ・リスボンに宿泊した。リスボン市内のジェロニモス修道院 *Mosteiro dos Jerónimos* にて悲しみの聖母 *Mater dolorosa* を見学したのち、市内の古書店で関係資料を収集した。リスボンでは引きつづきリベルダーデ・ティヴォリ・リスボンに滞在した。サン・ロケ教会と附属美術館を再訪したのち、イベリア航空機にてリスボン空港を出発し、マドリード・バラハス空港に到着した。マドリード滞在后、イベリア航空機にてマドリード・バラハス空港を出発し成田空港に帰還した。

### 3. 調査旅行の成果

今回の調査旅行で得ることができた研究上の収穫は多岐にわたるが、とりわけ大きな収穫は、恩寵の聖母の信仰とその造像活動を実地において知り得たことである。スペイン南部、とりわけポルトガルの大西洋沿岸部において恩寵の聖母像が数多く残されていた。これはポルトガルで13世紀にさかのぼるミゼリコルディアという慈善組織が崇拜対象としてきた聖母像である。「恩寵の聖母」*Nossa Senhora da Graça* の名のもとに、庇護の聖母 *Nossa Senhora da Mercê* と無原罪の聖母 *Virgem da Imaculada Conceição* の図像が包摂されているところに特徴がある。これがポルトガル国内においてあまねく崇拜されただけでなく、大航海時代にポルトガルの船乗りを守護する存在として信仰を集めた。前述のサグレス岬は16世紀の詩人カモンイスが「ここで大地が終わり、海がはじまる」*«Onde a terra se acaba e o mar começa»* (Camões, *Os Lusíadas*, III/20) と歌った場所である。このさいはての地に恩寵の聖母像が祀られ、それがアジア各地の貿易港や植民地にもたらされたのである。

リスボンのミゼリコルディアと同じ組織は、ポルトガルの植民地だったインドのゴアや中国のマカオにも設立されている。この事実はリスボン市内の古書店で入手した研究文献によって知ることができた (Victor Ribeiro, *Santa Casa da Misericórdia de Lisboa, subsídios para a sua história*, Academia Real das Ciências, Lisboa, 1902 ; reprodução, 1998)。それならば、マカオを経由してミゼリコルディアがキリシタン時代の日本にもたらされた可能性が十分に考えられよう。ここから先は今後の考察課題であるが、ミゼリコルディアの組織とともにその崇拜対象である恩寵の聖母像が東アジアの海域世界に伝播したとすれば、同じ時代に同じ地域で崇拜が活発化した媽祖との混淆が大きな可能性として浮かびあがってくる。

マカオには媽祖をまつる媽閣廟マコウミョウがあり、明代の創建と伝えられる。ポルトガルの船員メンデス・ピント *Mendes Pinto* が1555年にイエズス会士に送った書簡に「アマカオ」の名で出るのがこの地名の初出とされる (“*Copia de hũa carta do Irmão Fernão Mendes que escreveo Malaqua ao Reitor do Collegio de Guao de 1555 annos*”, *Fernão Mendes Pinto, Peregrinação*, transcrição de Adolfo Casais Monteiro, Biblioteca de autores portugueses, Imprensa Nacional, Casa da Moeda, Lisboa, 1983)。ここには「[ランパカオから] 6レグアの距離にあるこのアマカオ」*«este amaquao que he outras seis leguas [de lampacau] »* と記してある。これは阿媽澳の音写とされ、澳は入り江を意味する。マカ

オがポルトガル人の居住地となったのはその翌々年である。ほどなく東洋貿易の基地となり、さらにキリスト教布教の出発点となった。

媽祖の崇拝は仏教や道教という特定の宗教の枠組みを越えて民間に浸透した崇拝であるから、諸宗教との融合による広範な地域への伝播はきわめて容易であったのではないか。キリスト教の守護聖女のうちでも恩寵の聖母の崇拝がスペイン・ポルトガルから東アジア世界にもたらされた航海の守護神信仰のなかでも最大の崇拝対象となったことはまちがいない。ヨーロッパの最西端においてこれを実地に踏査できたことは、今回の調査旅行の最大の収穫であった。

媽祖研究の成果はすでに本学東洋学研究所刊行の『東洋学研究』54号掲載の論文「媽祖崇拝の拡大と諸宗教の融合」（2017年、pp.245-261）と同誌55号掲載の論文「媽祖説話の成立とその変容」（2018年、pp.305-319）および東洋大学井上円了記念研究助成報告論文集『日本文化の背景となる仏教文化の研究』掲載の論文「媽祖信仰の生成と伝播—中国宗教の日本文化への浸透」（東洋学研究所、2019年、pp.71-83）に発表した。今回の調査旅行の成果を取り入れた単著を執筆し、『東アジアの信仰と造像』と題して2020年度内に刊行したいと考えている。

#### 4. 研究課題の補完

国内特別研究の研究課題を補完するために、比較考察のひとつの手がかりとして中世ガリシア＝ポルトガル語による『聖母マリアのカンティーガ集』*Cantigas de Santa María*を取りあげた。これはカスティーリャ・レオン王国のアルフォンソ10世が13世紀に編纂した聖母信仰のための詩歌集である。そこに歌われた「港の聖マリア」*Santa María del Puerto*と呼ばれる聖地の信仰を実地において知ることができたのも今回の調査旅行の収穫のひとつであった。

カンティーガ集に登場する巡礼の聖地「港の聖マリア」は現在はエル・プエルト・デ・サンタ・マリア *El Puerto de Santa María* すなわち「聖マリアの港」と呼ばれ、アンダルシア南部の平原をうるおしてカディス湾に注ぐグアダレーテ川の河口に位置する。ジブラルタルに近いこの地はもっとも早くイスラームの勢力圏に入ったため、アラビア語の「橋」<sup>アーチ</sup>を語源とするアルカナール *al-Qanātir* の名で呼ばれていた。カンティーガ328番に「セビーリャの王国にあるヘレスに近く、アルカナールと呼ばれたところ」とある（«preto de Xerez, que éste eno reino de Sevilla, un lugar que Alcanate soya seer chamado», Walter Mettmann ed., *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, III, Acta universitatis Conimbrigensis, Coimbra, 1964. 以下、訳文はすべて原典から報告者が訳出した）。

アルフォンソ王は父フェルナンド3世の意志をついでアフリカ遠征をくわだて、1260年にこの港に船団を集結させた。同じ328番に「かつてこの良き場所にドン・アルフォンソ王は滞在した。それは誇り高い偉大な町サレに侵攻する艦隊を送ったときだった」«Ond' en este lugar bõo foi pousar hũa vegada el rey don Affonso, quando sa frota ouv' enviada que Çalé britaron toda, gran vila e muit' onrrada» とある。このとき王は隣接する港湾都市カディスを併合し、アルカナールの名を「港の聖マリア」に変えた。艦隊は夏の終わりに出航し、モロッコの港湾都市サレを攻略して秋に帰還した。

のちに王はこの地に教会を建立する。カンティーガ398番に「そこにレオンとカスティーリャの王

ドン・アルフォンソは気高くそして美しい教会を建てさせ、建物と礼拝堂を聖マリアにささげた。この聖所で多くの人々が彼女の名をたたえている」*«Ali el rey don Afonso de Leon e de Castela fez fazer ũa igreja muit' aposte e mui bela, que deu a santa Maria por casa e por capela, en que dela foss' o nome de muitas gentes loado»* と記してある。

プエルト市内のグアダレーテ川の河口近くにサン・マルコス城と呼ばれる城郭のよう建物がある。メスキータ（イスラームのモスク）を教会に造り替えたもので、後世に増築がかさねられた。これがカンティーガに歌われた聖マリアの教会である。367番に「その場所にとって必要とされる塔と壁で囲まれていた」*«de torres e de muro cercada, segund' aquel logar mester avia»* とある。現在も4基の塔をそなえ頑強な壁をめぐらせており、地中海沿岸に数多く見られる要塞教会の典型である。その建設のさなかに聖母が数々の奇跡を起こして完成した教会は、ほどなく巡礼の聖地として知られるようになった。

中世の人々が奇跡に期待したものはじつに多様であって、その解明は宗教史研究の重要な課題だが、『聖母マリア讃歌集』に限っていえば海難事故からの救助の話が少なくない。371番はプエルトにかかわるカンティーガのひとつで、題辞に「どのように港の聖マリアが帆船が難破して海に放り出された女性を救助したか」*«Como santa Maria do Porto guarriu ũa moller que perigorda dũa pinaça e caera no mar»* とある。同じく多数を占めるのは難病の治癒である。そのひとつ、391番は題辞に「どのように港の聖マリアがその地に巡礼に訪れた少女の不自由な脚をまっすぐにしたか」*«Como santa Maria do Porto corregeu hũa moça contreyta dos nenbros que levaron alá en romaria»* とある。

その少女は「ヘレス」*«Xerez»* の町から来たという。プエルトの北西、現在のヘレス・デ・ラ・フロロンテーラ Jerez de la Frontera である。両脚が気の毒なほど曲がっていた。港の聖マリアにすがる思いで、父親は少女を連れてきた。ヘレスからプエルトまでは40キロ近い距離がある。そこを歩きづめに歩いてきたのだ。教会に到着するとすぐに「この病を治してくださるよう [9日間にわたる] ノヴェナの祈りをおこなった」*« [seu padre en romaria ali] a troux' e teve noveas por daquel mal guareçer»* という。ある夜のこと、寝ていた少女の脚がひどく痛みだした。あまりの痛さにこらえきれず、大声で泣き叫んだ。かたわらにいた父親がなだめると少女は答えた。聖母が現れて自分の脚を折り曲げ、そのまま祭壇まで歩いて行かせたという。今まで感じたこともないほどの痛みだったと語った。まわりにいた人々が驚いて少女の脚を見ると、すでに完治していたとカンティーガは記している。

アルフォンソ王の在世中にカスティーリャ・レオン王国に編入されたサンタ・マリア・デル・プエルトは、たちまちのうちに奇跡をもたらす聖地として巡礼を惹きつけた。これはイスラームからの奪回にはじまり、教会建設の途上で奇跡がくりかえされたことが最初の契機となったことはまちがいない。さらに教会が完成してまもなく王自身の病が聖母の力によって癒えたことは、こうした傾向に大きく関わるであろう。このことはカンティーガ367番に語られている。大西洋に面した「港の聖マリア」の教会はまたイベリア半島の船員の崇拜を集めた。これがスペイン・ポルトガルから東アジア世界にもたらされた航海の守護神信仰のなかでも重要な崇拜対象となったことはまちがいない。いずれも『ライフデザイン学研究』に5回に分けて掲載中の論文「聖母マリアのカンティーガ—13世紀イベリアの信仰と芸術」において考察を継続しつつある。